

二〇一四年度

第三回 全統記述模試問題

国語

二〇一四年十月実施

現・古・漢型 一〇〇分
現・古型 一〇〇分
【現代文型】 八〇分

試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開かず、左記の注意事項をよく読むこと。

注 意 事 項

- 一、問題冊子は29ページである。
- 二、解答用紙は別冊になっている。(解答用紙冊子表紙の注意事項を熟読すること。)
- 三、本冊子に脱落や印刷不鮮明の箇所及び解答用紙の汚れ等があれば、試験監督者に申し出る。
- 四、左表のような「問題選択型」が用意されているので、志望する大学・学部・学科の出題範囲・科目にあわせて、選択型を選んで解答すること。出題範囲にあわない型を選択した場合には、志望校に対する判定が正しく出ないことがあるので注意すること。

選 択 型		問 題 番 号	
1	現代文・古文・漢文型	日	国
2	現代文・古文型	日	国
3	現代文型	日	国

解答すべき問題数は、現代文・古文・漢文型及び現代文・古文型はいずれも4問、現代文型が3問である。

- 五、試験開始の合図で解答用紙冊子の国語の解答用紙を切り離し、下段の所定欄に「選択型・氏名・在・卒高校名・クラス名・出席番号・受験番号」(受験票の発行を受けている場合のみ)を明確に記入すること。なお、氏名には必ずフリガナも記入のこと。
- 六、解答には、必ず黒色鉛筆を使用し、解答用紙の所定欄に記入すること。解答欄外に記入された解答部分は、採点対象外となる。
- 七、試験終了の合図で右記五、の項目を再度確認すること。

ク ラ ス		受験番号	
出席番号		氏 名	



一 【共通】

次の文章を読んで、後の問に答えよ。（配点 六十点）

なぜ、現代の若者論を考えるうえで一九七〇年代の若者論を振り返る必要があるのか。それにはふたつの理由がある。ひとつは、上野を^(注1)はじめとして、消費社会の欲望による人々の社会規範からの解放のインパクトを肯定的に捉える論者が、その延長線上にポストモダンの「脱アイデンティティ」の戦略を掲げていたことだ。次々と移り変わる流行にアンテナを伸ばし、欲望の赴くままに変転する自在さを持った消費者たちは、男／女はこうであらねばならないとか、日本人たるものかくあるべしといった規範の制約からも自由になることで、微細な差異の消費の主体たり得る。いわばそこでは「消費による自己実現」が目指されていたのであるが、この「自己実現」への志向は、現在でも——というより現在においてこそ広く共有されている価値観だ。

もうひとつの理由は、消費社会の最初の^(注2)A を受けた上野の世代、すなわち団塊世代こそ、郊外型ニューファミリーを形成した世代だったということだ。団塊の世代の子どもたちは、幾人かの論者によって郊外特有の社会病理を抱えていたことが指摘されているが、その子どもたちこそ、九〇年代後半から二〇〇〇年代前半の若年雇用環境が悪化した時期に社会に出なければならなかった世代、「ロストジェネレーション」と呼ばれる世代なのである。

ロストジェネレーションにとつては、「消費社会化による自由の獲得」というテーマは、ある意味でB である。なぜならばそれは、「消費者」たる資格を有していること、つまり収入や雇用の保証というC があって初めて成り立つものだからだ。若者たちから見れば、親世代の考える「当たり前」は、羨望と反発の対象にしかない。あるいは「貧乏くじ世代」としてのロストジェネレーションは、団塊の世代を中心とする高齢者の生活の安定のためにギセイにされた世代であり、彼らの所得を奪い取ることによってしか若者は救われない、とする極端な見方さえある。

こうした世代間でのギャップや対立がなぜ起きるのかということについて考えることは、再び若年雇用が厳しさを増していると言われる現在において非常に重要な課題だ。しかし、ここでひとつ押さえておかなければならないことがある。ロストジェネレーション「だけ」が、非正規雇用が突出して高いという一般的なイメージは、実証的には支持されないばかりか、むしろ若年非正規雇用率は世代が下るごとに上昇しており、雇用に関する構造変動がその背景にあることが推測できるということだ。

その構造変動要因として、雇用の流動化を進めた小泉政権以降の新自由主義化政策や、グローバル化による途上国との競争激化の影響を指摘する論者は多い。だが経済学者らによれば、二〇〇一年以降に突然雇用環境が悪化したという説は計量的に支持されず、またグローバル化の影響にしても、GDPに占める貿易額の比率などの指標から、さほど強い効果はもたらしていないという。

二〇〇〇年代の若者たちの非正規雇用率が上昇した理由については引き続き分析が必要だろうが、ともあれこうした知見からは、若者論としてのロストジェネレーションは、データの裏付けを持たないクロノセントリズム（自分の生きている時代は特別であるという思い込み）の一種であるということになるだろう。しかしながら、そうした思い込みが生まれる理由については、別途検討する余地がある。というのも近年、こうした「若者だけが損をしている」という議論が、諸外国でも見られるようになってきているからだ。

韓国では二〇〇七年に『88万ウォン世代』という本がベストセラーになり、韓国の民主化の原動力となった六〇年代生まれの「386世代」に比して、高い失業率と先の見えない社会の中で苦しむ七七〜八六年生まれの世代が「被害者」として注目を集めた。地域間格差も含め、日本以上の格差が存在すると言われる韓国でも、若者が特に損をした世代として名指しされているのだ。

さらに〇八年の金融危機以後は、欧米でも若年層がとりわけ「損」をした世代として取り上げられることが増えてい

る。○九年には、*Bloomberg Businessweek* 誌と *Financial Times* 紙といったメディアは、仕事に就けない英米の若者たちを、日本にならって「ロストジェネレーション」と呼んで特集した。本来のロストジェネレーションが、ヘミングウェイやフィッツジェラルドなど、一九二〇年代のアメリカの作家たちを指していたことを思えば、この言葉の「逆輸入」は、非常に興味深い現象である。またイギリス保守党の政治家D・ウィレッツは著書 *The Pinch* の中で、国内の個人資産の半分を保有しているイギリスのベビーブーマーが、社会保障からハイジ^bョされた若者たちの未来を奪っていると指摘している。

これは、その主張の正当性とは別の次元で検討されるべき事態だ。つまり、若者の世代は、上[・]の[・]世[・]代[・]に[・]比[・]べ[・]て[・]不[・]当[・]に[・]損[・]を[・]し[・]て[・]い[・]る[・]という「世代的不遇感」が、世界的に共有されるようになっていのである。

対象となる世代も、話題になった時代も微妙に異なるにもかかわらず、様々な国や地域でこの種の「世代的不遇感」がわき起こる理由は何だろうか。キーワードになるのは「既得権批判」である。世代的不遇感の議論には常に、彼らの不利な状況の原因となっている先行世代が「既得権」として批判されるという構図が存在しているのだ。さらにそれが「既得権」と呼ばれていることも重要だ。もともとこの言葉は日本においては、競争を免れることで大きな利権を保有することができた公務員や公共セクター、金融業界などを対象にして用いられていたが、若年雇用の悪化とともに、正社員一般にまで拡大して用いられるようになった。

そこには、およそふたつの意味が込められていると断言していい。ひとつは、既得権者は、その地位をたまたま得たに過ぎないのに、そこから得られる権益を不当に保有しているということ。もうひとつは、自分も生まれた時代が違えば、その恩恵にあずかることができたはずだということ。すなわち既得権批判とは、「本来ならばその権益は自分のものになるはずだった」という主張なのである。

日本の若年雇用に関して、「本来得られるはずだったもの」とは何か。高原基彰によれば、それは単なる正社員の地位

という意味でもなければ、欧米の新自由主義に対する対抗的理念としての社会民主主義でもない。メンバーシップを限定し、身内の保身のために他者を調達することを肯定する、日本型の「安定」を得る権利のことだ。こうした「安定」を手に入れることができた人々は、実際には多数派ではなかったにもかかわらず、多くの若者たちがその理想を自明の前提としている。近年、新入社員に対する意識調査において「いまの会社に一生勤めたい」とする回答が増えていることなどを挙げて、若者たちが「保守化」しているとの指摘もある。

本来ならば得られるはずだった、という主張の論理的な正当性を検討したり、計量調査を根拠に、彼らの考える前提が実際にはどの程度まであてはまるものなのかについて明らかにしたりすることは、世代的不満感の相対化という意味で重要ではある。だがそれだけでは、彼らの内的な合理性は揺るがないだろう。というのも、彼らの不満の D となっているのは、世代という偶然の要素で生き方に差がつくという理不尽さに対する不満なのであり、その差の尺度として ³ D となっている。 D が抽出されているに過ぎないと考えられるからだ。彼らの認識は誤解であるとしても、理由のある誤解である。

つまりここには、R・K・マートンの言う「文化的目標」と「制度的手段」の間の緊張関係によって生じる「手段のアンミー」の状態がある。いわゆる「標準モデル」のライフコースが目標として強く意識されているにもかかわらず、それを達成する手段がないと感じられるがゆえに、彼らは「本来、その権利を有していたのは自分だったはずだ」現在の状態は不当である」という主張によって、目標達成の手段を手元に引き寄せようとするのである。

ここで重要なのは、不遇な状況に置かれている対象が c バクゼンとしたものであることだ。社会経済的な属性のようなはつきりとした定義を持たない集団が想定されていることで、様々な d イツタツ行動が、その集団の「不遇さ」を象徴するものとして、つまり目標へのアクセス手段を剥奪されていることを訴えるための正当な行為の一部として認められる。○八年に起きた秋葉原連続殺傷事件が、通行人を巻き込んだ無差別殺傷であったにもかかわらず、加害者が「派遣社員の

E

「や」「格差社会のギセイ者」の象徴として扱われた例は、そのひとつのショウサ^eとなろう。

(鈴木謙介「若者のアイデンティティ」)

(注) 1 上野……上野千鶴子(一九四八年～)。日本の社会学者。

2 団塊世代……第二次大戦後、一九四〇年代後半に生まれたベビーブーム世代のこと。前後の世代より人口が多く、戦後社会の政治・経済・文化に大きな影響力を持った。

問一 傍線部 a～e のカタカナを漢字に直せ。

問二 空欄

A

E

に補う語として最も適当なものを、次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。ただし、同じものを二度以上用いてはならない。

ア 源泉 イ 足場 ウ 鬱屈 エ 洗礼 オ 悪夢

問三 傍線部 1 「親世代の考える『当たり前』」とは、どういうことを指しているのか。六十字以内(句読点等を含む)で説明せよ。

問四 傍線部2「この言葉の『逆輸入』は、非常に興味深い現象である」とあるが、筆者はどのような点を「興味深い」と

思っているのか。その説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 「ロストジェネレーション」という言葉は、本来文化的な問題に根差すものとして使われていたものであったのに、日本人がそれを経済的な用語として使い始め、それが欧米にまで広がったことには、現代社会における経済問題の深刻さがうかがえる、という点。

イ 「ロストジェネレーション」という言葉は、すでに一世紀近く前にアメリカで流行した言葉であるが、近年の日本でその言葉がもとの意味とは違ったものとして解釈されたのに、英米のメディアまでがその意味に注目したことには、日本文化の影響力の強さがうかがえる、という点。

ウ 「ロストジェネレーション」という言葉は、近年の日本では本来の意味からやや外れた使われ方をしているが、その言葉が欧米の経済専門誌でも取り上げられたということには、そこに日本の抱える様々な社会的な問題が集約されていることがうかがえる、という点。

エ 「ロストジェネレーション」という言葉は、日本ではもとの意味から離れた問題や対象を指摘する言葉として使われているが、それが欧米でも日本と同じ意味で用いられるようになったことには、その問題が多くの先進国で共有されていることがうかがえる、という点。

オ 「ロストジェネレーション」という言葉は、一九二〇年代のアメリカ社会の問題を特徴づけるものだったが、今世紀になり日本をはじめとする多くの国々でこの言葉が使われるようになったことには、現代社会がいまだ同様の問題を抱えていることがうかがえる、という点。

問五 傍線部3「その差の尺度として『既得権』が抽出されている」とはどういうことか。八十字以内（句読点等を含む）で説明せよ。

問六 本文の内容と合致しているものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 韓国や欧米の若者たちが、日本と同様の雇用問題に苦しめられているという事実は、その原因となる新自由主義やグローバル化が世界に共通する経済問題であることを物語っている。

イ 団塊世代の子どもたちは、親の世代と同じような社会的価値観を持ち、安定した人生を歩むことを目指しているのに、それを達成する手立てが奪われていると思っている。

ウ 先行世代に経済的にも政治的にも抑圧され、その反発から過激な社会変革を求める若者の存在は、日本ばかりではなく欧米や韓国でも共通してみられるが、その行動には微妙な差異もある。

エ 若者世代で非正規雇用率が上昇しているのは雇用に関する構造変動に主要因があり、先行世代が自分たちの権利を侵害しているという若者の主張は的外れで自己中心的なものである。

オ 非正規という自らの雇用形態に不安を抱く若者たちは、現実には何の利権も持たない正規雇用者を不当な既得権者と批判することで、世代間の対立図式をいたずらに煽^{あお}っている。

二 〔共通〕

次の文章を読んで、後の問に答えよ。（配点 四十点）

音楽について何か書くこと、語ることに何ほどの意味があるだろうか。

聴いて感じる、聴いて考える、聴いて思い描くことで充分であり、なおその上にそれについて語ることは、

X、情緒過多になったり或いは啓蒙的な口調になることによって、読む人を白々しい気分にしてしま

まうのではないか。ことに、それがモーツァルトのこととなれば尚更である。

しかし、それは何故なのだろう。

彼の作品が持つ美しさが言語による描写を拒否するからなのか、モーツァルトの個性が（曖昧な言葉だけでも）、あまりにも音楽そのものであるからなのか。

C・モルガンのポール・エリュアールに捧げられた小説『人間のしるし』（石川湧訳 岩波現代叢書）のなかに、

「――ぼくは音楽というものが、時にはどんな阿片になり得るかを、知りすぎるほど知っている。（中略）それは思想をわなにかける。それは意志を稀薄にしてしまう。不在証明と免罪符の役割を演ずる。野蛮人が放火と殺人をやったのけたあとで、モーツァルトを演奏して罪を清めたつもりになる」

という会話がある。

これを読んだ時、私は学生だったけれども、友人に、

「だから音楽は恐いんだ、殊にモーツァルトのような音楽は」

と語ったのを覚えている。

彼女は音楽の勉強をしていて、私達はストイックな運動のリーダーであった。（注1）その時、私が拒否しようとしていたもの

は何だったのだろうと今になって思う。美に対して私達は禁欲的になっていたのだろうか。あるいは美しいものに感動する自分の体内に「赤^(注2)ままや女の髪」を歌いたいと思う弱い部分があるのをひそかに自覚していて、美一般を拒否することによって、その弱い部分が表に現れ出るのを防ごうとしていたのであろうか。

Y

当時の私にとって、意志的で、人生に対して責任感に溢^{あふ}れ、闘いを積みあげることのなかで自己を形成してゆくようなベートーヴェンの音楽こそ望ましいものに思われていたのだ。

今から考えれば、モーツァルト¹について否定的に述べたその強さだけ、私は彼の音楽に魅^ひかれていたようである。それは私の幼なさであると同時に若さの特権みたいなものであったのかもしれない。

モーツァルトの音楽は、屢々^{しばしば}人生に何か規範を求め、その規範を梃^{てこ}子^こにして、自らを観念的に想定された高みへ引きあげようと身構えている人々にとって、否定的に、しかもイデオロギーや美学に準拠しての否定ではなく、言いかえれば没理論的な否定に遭遇してきたようである。吉田秀和氏によれば、一九〇二年にローマ法王が世俗音楽の精神が教会に滲透^{しんとう}するのを防止するために発した回勅^(注3)では、ハイドン、シューベルトと並んでモーツァルトが含まれていたと言うことである。

このようなモーツァルトの音楽の質は、西洋から渡来した文化を、何よりもまず頭で理解し、それに自らを近づけようと努力する姿勢で吸収しはじめた明治以後の日本人にとって、最も語ることを困難にする性格を持っていたように思われる。

しかし何か理由をつけて、論理の体系にはめ込むのでなければ、美しさを享受し得ないというのは悲しい習性である。しかもその論理そのものが生活感覚から遊離している場合には、創造を不可能にする場所での文化摂取なのだという気がする。

それはモーツァルトの音楽が持っている本質とは対極的な場になつ鑑賞姿勢である。

「あえていえば、モーツアルトの音楽的天才の歩みの非常な迅速さが、彼の堅い信仰を——いや信仰が堅ければこそ——おきざりにしてしまった、例の一つと言えよう」と吉田秀和氏は「戴冠ミサ曲」について書き、「それは、企画し計画した循環作法というより、初めに終りがあるような彼の靈感の恐ろしい時間の同時性のためだ。モーツアルトの天才がミサの枠をつきぬけてしまう」と結んでいる。たしかに彼の楽曲は流れ、変化し、爆発を含みつつ更に流れる。そこにあるのは積み重ねでも説得のための繰返しでもない。聴くことも演奏することもまた創造なのだ²という、作り演じ聞くという三つの動作の総てが創造に連らなつてゆくという弁証法を、彼ほど優しく自由な手つきで、時には物憂げに、時には歓喜に溢れて表現した作曲家を、私は知らない。

「自分は音楽家だから、思想や感情を音を使ってしか表現できない」

とモーツアルトは父親宛^{あて}に書いているが、私には彼は自分が音を使って表わしたものが、どのような思想であり、時代の感情であつたのかを意識していなかったように思われる。あるいはこの言い方は、思想や感情は必ず言葉によって表わし得るという迷信にもとづいているのかもしれないが、もし自分の作品の思想的な拡がりを知っていたら、モーツアルトはその奥ゆきの深さと近代というものの矛盾と終末が自分の感性の中に早くも望見されてしまっていることに彼自身慄然^{りうぜん}としたのではないか。

幸いなことに十八世紀後半の時代において、それを言葉に表わすことは不可能であつた。私には時おり言葉は音以上に存在被拘束性を持つてるように感じられる。別の言い方をすれば、言語によつては決して表現することの出来ない思想や感情があるのだと言うことを、モーツアルトほど活々^{いきいき}と見せてくれた人はなかつたと言えよう。

モーツアルトが生きた時代は、周知のことだけれどもフランス大革命に象徴される近代の確立期であつた。ハイドンよりも二十四歳若くベートーヴェンよりも十四歳年長であつた。隣国の大革命を引き金にしてはしまった、シュトゥルム・^(注4)ウント・ドラングの時代の空気を充分に吸う間もなく、彼は一七九一年に夭折^{ようせつ}してしまう。

このようなことを書くのは、モーツァルトを歴史の時代区分の枠に嵌め込んで、彼の作品を時代の光背によって浮き立たせるためではない。逆に、彼のような才能にとつては、時代さえも個性を引き出す素材として存在したかのように見えることを明らかにしたいからなのだ。

ベートーヴェンの音楽を聴く時、彼の苦悩を煮詰めたような顔を想起する人は多いと思う。そのために私は、屢々肖像画を見てしまったことを悔んだほどだ。ベートーヴェンの音楽も、あの俗悪な肖像画が与える表面的な印象よりもずっと深く美しいものなのだから。

しかしモーツァルトの肖像も同じように見ているはずなのに、私の内側ではどうしても一つの像を結ばないのである。彼の名前と共に浮び上ってくるのは、彼の顔ではなく彼の旋律であり音そのものだ。だから彼の音楽を官能的で甘美だと言うことも可能である。クラシックな旋律で鞅なめされたポリフォニー(注5)と総てを包み込むような和声の前で人々は論理の武装を解除し彼の世界へと参加する。だから、ファッシストさえモーツァルトに魅かれたのだ。(注6)

近代が終熄しゅうそくし、近代を支えた社会構造が崩壊しようとしている時、モーツァルトが予感していた不安が美しく人々の心よみがえに甦りつつある。この共感を滅びへの共感と読みとることも可能だろう。しかし私は、より深く、彼は人間存在そのものの喜びと不安とを、近代の確立期において、早くもその個性の上に花開かせたのだと思っている。

(辻井 喬「私のなかのモーツァルト」)

(注) 1 ストイックな運動……筆者は学生時代に過酷な政治活動に関与しており、「ストイック(＝禁欲的)な運動」とはこの活動のことを指している。

2 “赤ままや女の髪”……中野重治の詩「歌」の一節に、「おまえは歌うな おまえは赤ままの花やとんぼの羽根を歌うな 風のささやきや女の髪の毛の匂いを歌うな すべてのひよわなもの すべてのうそうそとしたも

のすべてのものうげなものを撥き去れ」とある。

3 回勅……カトリック教会で、ローマ教皇が信仰、道徳、社会問題について信徒に与える書簡。

4 シュトゥルム・ウント・ドラング……十八世紀後半にドイツで展開された革新的な文学運動を指す。理性に対する感情の優越を主張し、後のロマン主義へとつながっていった。日本では「疾風怒濤」と訳されるが多い。

5 ポリフォニー……複数の声部（パート）がそれぞれ独立したメロディーをもって全体を構成する音楽様式。

6 ファッシスト……全体主義者のこと。

問一 空欄

X

Y

び、記号で答えよ。

に入れるのに最も適当な語句を、次の各群のアイオの中からそれぞれ一つずつ選

ア 多くの政治への諦念、政治家への諦念と同じように

イ 総ての信条の告白、愛の告白と同じように

X
ウ あらゆる美への感動、美への沈黙と同じように

エ 総ての理論、総ての命題と同じように

オ あらゆる音楽の中にある思想、感情と同じように

ア 繭が永遠にその闇を保ち続けるように

イ 蚕がやがて美しい姿を見せるように

Y
ウ 蝶が冬になれば老いて姿を空に消すように

エ 蟬が自分の命の短さを知っているように

オ 蛹が寒い季節に固い殻をかぶるように

問二 傍線部1「モーツァルトについて否定的に述べた」とあるが、筆者は「モーツァルト」の音楽のどのような点を「否定的」に捉えていたのか。六十字以内（句読点等を含む）で説明せよ。

問三 傍線部2「聴くことも演奏することでもまた創造なのだ」とあるが、「聴くことも」「創造なのだ」と言えるのはなぜか。その説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 音楽を自分の生きた実感のままに聴くことで、作者や演奏者とともに音楽の表現世界に参与できるから。

イ 作者や演奏者とともに音楽を体験したことが、その後の日常生活を彩る甘美な思い出となるから。

ウ 既存の論理に縛られず、作者や演奏者とともに音楽を聴くことで、自分もまた彼らと同じ立場になれるから。

エ 生活の実感に即して音楽を聴くことで、作者や演奏者だけでなく聴者も、論理にこだわる日本文化を変革できるから。

オ 西洋音楽を聴くことで、日本と西洋を融和させた音楽を作者や演奏者とともに生み出すことができるから。

問四 傍線部3「モーツァルトが予感していた不安」とはどのようなものだと考えられるか。その説明として最も適当な

ものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 自分の音楽が、やがて純真な若者を甘美な世界に引きずり込んでしまうのではないかという不安。

イ 時代に適合せず感情を音によってしか表現できない自分は、音楽家として失格なのではないかという不安。

ウ 人間への共感を表現した自分の音楽が、逆に近代文明の終熄を表現していると誤解されてしまうのではないかという不安。

エ 自分の音楽がその性格に反し、時代を超えて全体主義的な政治に利用されてしまうのではないかという不安。

オ 言葉でなく音で自分が表わそうとしているものを人々が十分に理解しないまま、近代は終わるのではないかという不安。

問五 本文の内容と合致するものを、次のア～カの中から二つ選び、記号で答えよ。

ア モーツァルトが自らの音楽を言葉によって語らなかったのは、彼が言葉自体の限界を知っていたからである。

イ 生前には認められなかったモーツァルトの音楽の素晴らしさが、最近ようやく人々の心を捉えはじめている。

ウ 美に対する評価は相対的なものだが、天才と言われる人間はその人間の生きていた時や場所と無関係に存在している。

エ モーツァルトの音楽は既成の言葉はもちろん、彼自身の心情さえも追い越してしまうような可能性を持つ。

オ イデオロギーに則り生きようとする人間は、自分に対する厳しさをうかがわせるような音楽を称揚するとも言える。

カ モーツァルトの音楽は、彼自身の顔さえも忘れさせるほど、人間の普遍的な感情を表現していると言える。

国語の問題は次のページに続く。

次の文章は『蜻蛉日記』の一節で、夫兼家の不実かねいえに悩んでいた作者が、病氣にかかつて心細くなり、夫に宛てて遺書めいたものを書く場面である。これを読んで、後の問に答えよ。(配点 五十点)

(注1)よからずはとのみ思ふ身なれば、つゆばかり惜しとはあらぬを、ただ、このひとりある人いかにせむとばかり思ひつづくるにぞ、涙せきあへぬ。なほあやしく、例のここにたがひておぼゆる気色も見ゆべければ、やむことなき僧など呼びおこせなどしつ、試みるに、さらにいかにもいかにもあらねば、「かうしつ死1にもこそすれ。にはかにては、おぼしきこともいはれぬものにこそあなれ、かくて果てなば、いと口惜しかるべし。2あるほどにだにあらば、思ひあらむにしがひても、語らひつべきを」と思ひて、脇息けふそくにおしかかりて、書きけることは、

命長かるべしとのみのたまへど、見果て奉りてむとのみ思ひつつありつるを、かぎりにもやなりぬらむ、あやしく心細きこちのすればなむ。つねに聞ゆるやうに、世に久しきことの、いと思はずなれば、ちりばかり惜しきにはあらで、ただこの幼き人の上aなむ、いみじくおぼえ侍るものはありける。3たはぶれにも御気色のものしきをば、いとわびしと思ひて侍めるを、いと大きなことなくて侍らむには、御気色など見せ給ふな。いと罪深き身に侍れば、

(注3)風だにも思はぬかたに寄せざらばこの世のことはかの世にも見む

侍らざらむ世にさへ、うとうとしくもてなし給ふ人あらば、つらくなむおぼゆべき。年ごろ、御覧じ果つまじくおぼえながら、かはりも果てざりける御心を見給ふれば、4それいとよくかへりみさせ給へ。5譲りおきてなど思ひ給へつるもしるく、bかくなりぬべかめれば、いと長くなむ思ひ聞ゆる。人にもいはぬことの、をかしなど聞えつるも、忘れず

やあらむとすらむ。折しもあれ、対面に聞ゆべきほどにもあらざりければ、

I

しげき道とかいとど死出の

II

かつがつ濡るる

III

いかにせむ

と書きて、端に、「あとには、^(注4)「ちりのことをなむあやまたぎなる才、よく習へとなむ、聞えおきたる」とのたまはせよ」と書きて、封じて、上に、「忌^(注5)など果てなむに、御覽^(注6)ぜさすべし」と書きて、かたはらなる唐櫃^{からづ}に、ゐざり寄りて入れつ。見る人あやしと思ふべけれど、久しくしならば、かくだにものせざらむことの、いと胸いたかるべければなむ^e。

(注)

- 1 よからずは……夫兼家との仲がうまくいかないのなら死ぬ方でしたが、ということ。
- 2 このひとりある人……兼家との子、道綱^{みちのう}のこと。後出の「この幼き人」も同じ。
- 3 思はぬかた……物思いのない方角。ここでは、極楽浄土のこと。
- 4 ちりのこと……ちよつとしたこと。
- 5 忌……死後四十九日間。

問一 傍線部1「死にもこそすれ」、5「思ひ給へつるもしるく」を、それぞれ現代語訳せよ。

問二 傍線部2「あるほどにだにあらば」、6「御覽ぜさすべし」の解釈として最も適当なものを、次の各群のアイオの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

- | | | | |
|-----------------------------|--|--|--|
| ア 夫の愛情があるうちでさえ私が不満そうにしているので | | | |
| イ わが子が幼い間だけでも夫がかわいがってくれるのなら | | | |
| ウ 幼いわが子が一人前になった時に私が元気であるのなら | | | |
| エ せめて私の命のあるうちに夫が訪ねて来てくれるのなら | | | |
| オ 私が気弱になっている時でさえ夫が冷たく振る舞うので | | | |
| ア 兼家様、この手紙を御覧になってください | | | |
| イ 兼家様に、この手紙をお目かけなさい | | | |
| ウ 道綱よ、お父様と一緒にこの手紙を見なさい | | | |
| エ 道綱よ、お父様にこの手紙を見せなさい | | | |
| オ 道綱に、この手紙を読んでやってください | | | |

問三 波線部a i eの「なむ」の中から、文法的に異なるものを一つ選び、記号で答えよ。

問四 傍線部3「たはぶれにも御気色のものしきをば、いとわびしと思ひて侍める」とは、どういうことを言っているのか。わかりやすく五十字以内（句読点等を含む）で説明せよ。

問五 傍線部4「それいとよくかへりみさせ給へ」とあるが、作者は誰にどうしてほしいと言っているのか。解答欄の形式に合わせて、簡潔に説明せよ。

問六 和歌中の空欄

I

III

び、記号で答えよ。

に入る語の組み合わせとして最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選

ア	I	草	II	谷	III	顔
イ	I	葉	II	峽	III	袂
ウ	I	露	II	山	III	袖
エ	I	人	II	橋	III	衣
オ	I	風	II	旅	III	心

問七 次の作品の中で、『蜻蛉日記』の次に成立したものはどれか。次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 更級日記 イ 十六夜日記 ウ 讃岐典侍日記 エ 土佐日記 オ 紫式部日記

四

現・古・漢型

次の文章を読んで、後の問に答えよ。(設問の都合で、送り仮名を省いたところがある。)(配点 五十点)

吳僧亢拙^イ与^ア余遊^ア三十年。一日自^リ吳過^ル余。持^チ臨邛^{きやう}高文度字^ハ惟^ゐ正^{せい}所^{ところ}為^{つく}詩^し見^み示^し、且^{かつ}曰^く、「吾^ガ鄉^ニ有^リ丁景仁^{ていけいにん}、自^リ少^し小^こ學^{がく}於^ニ高惟正^{こうゐせい}。惟正^{せい}既^{すなは}没^{ぼつ}、景仁^{けいにん}哀^{しみ}其^{その}師^し之^の無^く成^{せい}而^{して}至^{いた}於^ニ卒^す也^{なり}、求^{もと}其^{その}遺稿^{いこう}、得^え詩^し百篇^{ひゃくぺん}。」刊^{きん}諸^{しよ}木^{ぼく}、使^{つか}行^は于^ニ世^よ。」余聞^{きこ}而^{して}嘉^{よろこ}之^{なり}。自^リ師弟子^{しでんし}之道^{のち}廢^{すた}、世^よ之^の學^{がく}者^{しや}、其^{その}始^は未^も嘗^か無^く師^し、及^{およ}其^{その}稍^や有^ル所^{ところ}立^た、即^{すなは}以^て師^し為^す諱^{きん}。蓋^{しか}不^レ止^ま於^ニ師^し死^し而^{して}遂^{すなは}倍^{そむ}之^{なり}也^{なり}。而^{して}況^{いか}高君^{かうきん}之^の窮^{きゆう}。其^{その}生^{せい}也^{なり}無^く以^て為^す資^し、其^{その}死^し也^{なり}不^レ以^て壽^{じゆう}。而^{して}又^{また}無^く子孫^{しそん}以^て繼^{つぎ}其^{その}後^{あと}。景仁^{けいにん}拳拳^{けんけん}不^レ忘^{わす}私淑^{ししよく}之意^{のい}、必^{かな}欲^ほ使^{つか}其^{その}名^な因^よ是^{こゝ}編^ひ以^て不^レ朽^く。忠厚^{ちゆうこう}之^の至^{いた}也^{なり}。推^{おし}是^{こゝ}以^て往^{かへ}、則^{すなは}其^{その}於^ニ人倫^{じんりん}之間^{のあいだ}、從^{したが}可^べ知^る已^{なり}。故^{ゆゑ}余深^{こゝろ}嘉^ほ之^{なり}而^{して}為^す之^の序^{ぎよ}。

(趙孟頫『松雪齋文集』)

(注)

○呉——地名。

○亢拙——人名。

○臨邛——地名。

○高文度——人名。

○丁景仁——人名。

○刊「諸木」——刊行する。

○諱——忌み嫌うもの。

○拳拳——うやうやしく慎むさま。

○私淑——人の徳を慕い、手本としてわが身を修める。

○忠厚——まごころ。

○人倫——人として守るべき道。

○序——序文。

問一 傍線部イ「与」、ロ「蓋」の読みを、送り仮名も含めて平仮名ばかりで答えよ。

問二 傍線部 a「遊」、b「卒」の意味を簡潔に答えよ。

問三 傍線部 (i)「其」、(ii)「之」の指示するものを、それぞれ文中から抜き出して答えよ。

問四 傍線部 1「其始未嘗無師」を書き下し文に改めよ。

問五 傍線部2「其生也無_レ以為_レ資、其死也不_レ以_レ寿」とはどういう意味か。最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 高惟正はあくせく利益を求めることもなく、やすらかな死を迎えることができた。

イ 高惟正は家族に財産を遺すことができず、盛大な葬式を行ってもらえなかった。

ウ 高惟正は学者として名を成すことができず、無念の思いを抱きつつ最期を迎えた。

エ 高惟正は暮らしを立てることもままならず、長生きすることもできなかった。

オ 高惟正はすぐれた作品を世に発表することもなく、若くして亡くなった。

問六 傍線部3「必欲_レ使_下其名因_二是編_一以不朽_上」を現代語訳せよ。

問七 二重傍線部「余聞而嘉_レ之」とあるが、誰のどのような行為をほめたのか。七十字以内（句読点等を含む）で説明せよ。

五

現・古型

【現代文型】

次の文章を読んで、後の問に答えよ。（配点 五十点）

近代文学、特に新興の小説という新しい文学の中にさくらを求めようとする、その対象を見失ってしまう。

（注1）一葉の最初の小説『闇桜』はこの時代の数少ないさくらの小説の一編であり、一葉唯一のさくらに想を得た作品だった。

二十二歳の園田良之助と十六歳の中村千代は隣り合う仲好い幼馴染^{おんなじみ}であつたが、いつか千代は良之助を深く愛するようになる。良之助は千代のそういう思いに気づかない。千代は愛を告げられぬ悩みから病んでしまう。やがて千代は毎日に衰弱し、良之助の見舞に來た日に息を引き取る。良之助はそのとき、はじめて千代の思いの深さを知って哀しみ、千代の家から帰ろうとすると、闇の中に家桜の花がはらはらと散っている。

このさくらはおそらく流行のソメイヨシノであつたろう。千代の恋は良之助の知らぬところで咲く、彼が気づいたときはその命とともに散っていったという小説は、一葉の散るさくらとしてのさくら観がうかがわれる。

さくらに生命の輝き、ことに女性のいのちを見るとこのさくら観は王朝文学サロンのさくら観をそのまま踏襲^aしている。やがて一葉は『たけくらべ』を書いて、古い文学理念から脱皮^{よこ}していったとき、もう二度とさくらを書くことしなかった。

明治文学の近代意識は旧い文学の美意識を捨てて、西洋先進文化の中の文学に倣^bおうとする。その過程でさくらは

X

一葉のさくら観には、江戸俳諧にはなかった新しい散るさくらに絶えてゆく生命を見る。——つまり、さくらをいのちの象徴と見るさくら観がうかがわれた。現代の読者たちはそのさくら観を少しも奇異とは見ないだろうが、これは八世紀

以来のさくら観になかった全く異質の観念だった。

確かにさくらは命の輝きを象徴していた。だからこそ散るさくらが惜しまれたのだが、散るさくらに命の終わり際を見
るという観念——つまり、さくらに死の影を見るといふさくら観は、^(注2) いままで取りあげて来た作品には全くあり得なかつた。それではさくらに死の影を見るさくら観は、明治に入つて文明開化とともに突然生まれたものかといへばそうでもない。

あの偏狭な江戸後期のラジカリスト本居宣長でさえも、さくらが死の花だなどとは歌っていない。これは文学作品の中に求めたものではなくて、江戸の歌舞伎、その集大成といわれている『仮名手本忠臣蔵』^(注3)に源流があるようだ。周知のうに歌舞伎はその演劇空間に実に上手にさくらを使って、クライマックスの効果を盛りあげている。さくらとドラマは生活の中に取り入れられ、感覚の中で完全に癒着してしまい、現実のさくらを見ると反射的に歌舞伎の演劇空間に装置や効果として用いられたさくらを連想するようになる。「ああ、五右衛門（『楼門五三桐』^{さんもんごさんざり}）のさくらそっくりだ」とか、「忠信狐（『義経千本桜』）が出て来そうなほど咲いている」といふふうにドラマを通じてさくらを見ていたろう。

「花は桜木、人は武士」も『忠臣蔵』の台詞として波及していったように「判官切腹の場」で、その死の臨場感を盛り上げるのは、舞台いっばいに飾られたさくらと、散りゆく花吹雪であつた。悲劇はさくらに助けられていつそう悲愴感を演劇空間に盛り上げる。劇的感動とともに死とさくらがしつかり観客の心に刻印されてゆく。日本の隅々まで十八世紀のなかばから約二百五十年間、繰り返し観客の心に刻印を続けているうちに、さくらは悲運の貴公子塩冶判官（浅野内匠頭^{たみのかみ}）の死の悲愴美を強烈に映し出し、さくらは散り際美しい武士の花といふさくら観が、能楽の観客などよりも遙かに広い層の観客に定着した。

そのさくら観に対して、江戸時代のもはや戦闘の要員ではなくすっかり官僚化した侍たちも積極的に否定する理由もなく、むしろ一種の見栄としてさくらの死といふさくら観を受け入れた。しかし、その死に臨んで芝居のような訳にはいか

なかったのは幕末、戊辰^{ぼしん}の動乱で露呈された通りだった。

¹ 一葉のさくら観はこうしたさくら観の一部を引き継いでいたものだった。が、それよりも、このさくら観が大きく増幅していったのは、幕末の志士たちと呼ばれる若いラジカルな革命家たちのさくら観だったろう。本居宣長によって発揚された日本の花としてのさくら観は彼らの攘夷の思想の象徴となり、その実践者である彼ら自身をさくらに仮託した。「花は桜木、人は武士」である。もっともこの革命的若者たちはリーダーの少数を除いて侍身分以外の階層の出身者、あるいは士籍があってもごく軽い身分の出身者が多かった。それゆえ、武士に階級としての執着が深かったのだろう。

そういう革命家たちの幸運な生存者たちによって明治政府は組織されたから、さくらのラジカルイズムは当然、政府の中核にも存在していた。彼らは新政府の国防軍創設に当たって、旧侍階級以外の一般国民から徴兵制によって国防の実際を分担させようとした。

戦国末期の兵農分離以来、戦闘は専門としての武士が三世^{わん}に亘^{わた}って携^もわり、農工商に属する階層は全く別な価値観に生きて来た。廃藩置県（一八七二）以後、旧侍階級は士族となったが、国民皆兵による国防軍を戦闘の専門職として強化するためには、彼らを専門職である士族に倣^なって擬似士族化する必要があった。それを痛感させられたのは明治十年（一八七七）の鹿児島県士族の反乱鎮圧だった。そして、反乱鎮定後に暴発した帰還兵士たちの暴動、竹橋事件であった。国防軍の擬似士族化の中で、さくらは王朝文化の華としてのさくらから、士族というよりも武士の精神のさくら、その死を飾るべき国華というふうになく異質なものに変質した。

生命の輝きとしてのさくら、美しい女身^{めい}の倣^なとしてのさくらは明治士族の手で、武の化身、死の花となった。歌舞伎の演劇空間の虚構の悲愴美が宣長の国粹思想を吸収して、明治士族たちの手で国民皆兵を推進する² 国華としてのさくらを作り上げた。この国粹思想の具現としてのさくらは、明治政府の国防軍として創設された軍の膨張とともに二度の対外戦争に勝利を収めた後、国民的思想として定着するようになる。

明治も末期の四十年代、新体詩人・唱歌作詞家として名を馳^はせた大和田建樹は、陸軍省の依頼によって『陸軍唱歌』を作詞編集する際、さくらをメインテーマに軍歌「歩兵の本領」をこの唱歌集に収めている。

万^{ばん}朵^だの桜^えか 襟^えの色

花は吉野に 嵐吹く

大^{やまと}和^と男子^{をのこ}と 生まれなば

散兵線の 花と散れ

この軍歌の歌い継がれるところ、さくらは

Y

となった。

(小川和佑『桜の文学史』)

(注) 1 一葉……樋口一葉(一八七二―一八九六)。明治期の小説家。歌人。

2 いままで取りあげて来た作品……本文以前に、『日本書紀』の中の桜を題材にした一節や、西行、本居宣長の桜の歌などが論じられている。

3 ラジカリスト……過激で急進的(＝ラジカル)な考え方(＝ラジカリズム)の持ち主。

問一 傍線部 a i e の漢字の読みをひらがなで記せ。

問二

X

Y

群のアイオの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

に入れるのに最も適当な語句を、次の各

ア 新たな美を獲得することになるのだった

イ 作家たちから見捨てられたのだった

X
ウ 逆に伝統に突き当たってしまったのだった

エ 死の影をより色濃く表すようになった

オ 人々にとって多様な意味をもつようになった

ア 久遠に栄える国をことほぐ理念の花

イ 死の悲愴美にいろどられた形而上の花

Y
ウ 戦いに敗れた兵士に捧げられる哀悼の花

エ いのちの重みを逆説的に物語る象徴の花

オ 富国強兵の思想を具現化する日本の花

問三 傍線部1「一葉のさくら観」とあるが、その「さくら観」はどのようにして形成されたのか。八十字以内（句読点

等を含む）で説明せよ。

問四 傍線部2「国華としてのさくらを作り上げた」とあるが、「国華としてのさくら」を「作り上げる必要があった

のはどうしてか。その説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 王朝文化の華という従来の軟弱なさくら観では、富国強兵という国策を実現するためには避けられない対外戦争での勝利を妨げる可能性があったから。

イ 国防のために亡くなった人々を讃えなければ、国民皆兵という制度に強い不満を抱く兵士たちが再び反乱を起こす可能性があったから。

ウ 歌舞伎の死の悲愴美を国粹思想に昇華させ、国防の専門職として国家のために亡くなった士族たちの死を美化する必要があったから。

エ 国を守る兵士を武士に重ね、その死を賛美することを通じて、すべての国民が国のために命を捧げるという意識を強化する必要があったから。

オ 徴兵制によって旧侍階級以外の一般国民にも国防の実際を分担させ、国民皆兵制による、戦闘の専門職である国防軍を創設する必要があったから。

問五 本文の内容に合致するものを、次のア～カの中から二つ選び、記号で答えよ。

- ア 江戸時代の官僚化した武士にとって、さくらのように美しく散る死は望ましいものだった。
イ 人間の命を尊いものとして賛美する感覚は、いつの時代の日本人にも共通して見られるものである。
ウ 幕末の志士たちの多くは、その出自ゆえに武士階級に深い執着を抱かざるを得なかった。
エ 本居宣長は、国のために命を捧げるといふ国粹思想を象徴するさくらに自身を仮託した。
オ 一葉の小説に描かれた近代意識は、現代の読者が抱くさくら観に通底している。
カ 歌舞伎のさくらが強烈な印象を与えたため、江戸の庶民は現実のさくらさえ虚構を踏まえて観賞していた。

問六 樋口一葉の作品を、次のア～カの中から二つ選び、記号で答えよ。

- ア 十三夜 イ あらくれ ウ 金色夜叉 エ 青年 オ にごりえ カ それから

